

顕彰の言葉

島津雨に迎えられた今日二十五日、時は流れ、わが国治水史上最大の難事業と云われた宝暦治水工事より二百五十七年の年を迎えました。ここに、苦難を極めた家老平田鞞負翁並びに薩摩義士の方々のご霊前に、謹んで顕彰の言葉を奉じ上げます。

私達の郷土岐阜県西濃地方は、日本列島のほぼ中央に位置し、北部に高く険しい日本アルプスの山々がそびえ立ち、それらを水源とする木曾、長良、揖斐の三大河川は、寄り添うように広大な濃尾平野を流れています。我々の住む大垣は、その濃尾平野の西南方に位置し、歴史の中でおだやかな自然の恵みを受けて繁栄を続ける一方、頻繁に水害との戦いを強いられてまいりました。

昭和三十四年、東海地方を襲った伊勢湾台風の被害は甚大であり、多数の人命と多くの財産を失いました。近代技術の粋を集めた工法で造られた堤防が各所で決壊し、被害を増大させた中、薩摩義士によって造られた千本松原の堤防は、長良、揖斐の濁流にも耐え無傷でありました。これを契機に大垣青年クラブは、美濃に住む人間として、薩摩義士の御偉業と御遺徳に対して深く感銘を受け、薩摩義士顕彰事業を始めました。この宝暦治水工事で想像を絶する御苦勞をなされた薩摩の国の人々、義士の方々の心中を想い、感謝の気持ち捧げて、後世に語り伝えていくことが我々に課せられた使命であり責務であることを、平田鞞負翁の尊像を拝し再認識した所存であります。

現在この地には、義士の方々が涙ながらに植えたと言われる千本にも及ぶ日向松が悠然と立ち並んでおります。我々クラブ員は、その日向松を見上げるたびに、質実剛健な精神から秀でる薩摩義士の御偉業に対し、多大な感謝の念を深く刻んでおります。

それは、私達が薩摩義士の顕彰を行う中で、御偉業から学んだ三つの心であります。

一つ目は、どんな困難に直面しても音をあげず、苦しさ忍耐でやり抜く、不撓不屈の心。

二つ目は、異国の地の民を救う為に、崇高な精神を以って工事に臨まれ、他人の幸せを守る為に自己を犠牲にしてまでも尽くされた、奉仕の心。

三つ目は、恩恵を受けた想いを宝暦治水工事の完成から二百五十七年という長い年月が過ぎた現在でも心に宿らせて感謝の気持ちを忘れない、報恩感謝の心であります。

私達は、この薩摩義士の方々から学んだ三つの心を常に宿し、今後もより一層の精進をしていくと共に、未来を担う青少年に伝えていく所存であります。感受性豊かである子供達が故に昨今では、「切れやすい子供」、「我慢できない子供」が増えているとも言われています。また、人間疎外、人間不信などといった心の荒廃が顕著な時代であるとも言われていますが、こんな時代だからこそ地域社会に対して思いやりの心を持つて精力的に事業を展開し、教わった三つの心を伝え、「心の豊かさ」を育んでいくことが大切であると思います。

昭和四十三年以来、四十四回に及ぶ大垣市への鹿兒島市中学生招待行事を通じて、将来を担う子供達に、自分達の故郷の先祖がいかにすばらしく偉大であったかを、自分の目で見て学んで頂き、故郷の誇りとして胸に抱き、長い人生の糧として、未来に向けて歩んでくれることを、我々は切に願って止みません。

去る三月十一日、我国未曾有の大災害である東北大地震にて多くの方々々が被災され、メディアを通じて過酷な状況が写し出されます。もし平田鞞負翁並びに薩摩義士の方々が、今の時代に御存命であれば、どのようにお考えになり、どう行動されたでしょうか。きっと私達先祖にして頂いた時と同じ事をされていると思います。今こそ、学んだ三つの精神を胸に宿し、地域のため、東北のため、そして日本のため微力ながらに、何か出来ることはないかと考え行動していきたいと思えます。いつの時代も日本全国心はひとつ。がんばろう日本。

最後に、本日の慰霊祭には、大垣青年クラブ員二十余名が参列させて頂きました。平田鞞負翁並びに薩摩義士の方々の聖地に立ち、改めて熱くこみ上げる感謝と感動の念で胸が一杯になりました。これからも今の気持ちを高め、貫き通す事を本日ここにお誓いし、薩摩義士の方々の御霊が安らかならんことをお祈り申し上げ、顕彰の言葉とさせて頂きます。

平成二十三年五月二十五日

社団法人 大垣青年クラブ

第五十五期会長 牧野 英紀